



戦前昭和期の大阪府郡部の工業化について

—『全国工場通覧』からみた東大阪市域の動向—

衣 本 篁 彦

概要 戦前昭和期の大阪府下の周辺郡部の工業化動向を、東部大阪地域に限定して考察した。これを可能にした資料が近年復刻された。それが商工省編纂『全国工場通覧』（昭和4～14年：全11巻）である。これには5人以上の職工を常時使用する経営規模の工場について、工場名、製造品目、所在地、創業年月、業主名が掲載されている。この資料に注目したのは、工場立地の所在地が町村レベル、特に町村大字まで記載されている点である。多くの統計書は府県郡部までの集計された数値しか発表されていないのである。したがって、上記資料より、戦前期の東大阪市域を構成した3町15村（昭和4年当時）に存在した工場が抽出でき、それらの動向が町村レベルで、ある一定期間について把握できる。本稿では、世界恐慌直前の昭和4年から日中戦争突入の昭和12年の時期、戦争経済への再編が本格化する直前のお阪東部地域の工業化動向を分析した結果、布施市域と枚岡・繩手村域の二つの工場集積地の形成による工業化の進展が確認できた。

キーワード 町村別工場数、郡部工業化、重化学工業部門

1. はじめに

明治18年に設立された南海鉄道は、明治32年に大阪難波一和歌山市間を開通させた後、大正元年より電力供給事業を開始するとともに、大正期を通じて輸送力を強化し、泉北・泉南をつなぐ泉州工業地帯の形成の呼び水の役割を果たした。また、明治43年に大阪・天満橋一京都・三条間の開通をみた京阪電鉄も、翌44年より電力供給事業を開始するとともに、輸送力を強化し、昭和4年の交野電鉄の開通や翌5年枚方大橋の完成と京阪国道の整備と相俟って、大阪の「鬼門」といわれ、府下の他地域に比べて開発が遅れがちとなっていた北河内地域に、都市化、工業化の機会を大きくし、近郊農村を変貌させていった。特に、昭和7年から8年にかけて、松下電器や東洋紡績等の工場が進出し、守口町や門真

村を中心に周辺地域の工業化や宅地化が進んだ⁽¹⁾。

それでは、大阪郡部への工業化が浸透しはじめたこの時期の中河内地域では、どうであったのか。この中河内地域にも鉄道の開通と電力供給事業の開始が大正期にみられた。すなわち、大阪電気軌道が大正3年に大阪—奈良間の開通を図り（そして大正13年には、布施—恩地間を開通させていたが）、電灯・電力供給事業は本業の全線開通前年の大正2年より開始していた。もっとも、その電力・電灯供給地域をみると、奈良県生駒郡や大阪府北河内郡の一部に供給されていたが、中河内地域に関していえば、東大阪市域に当たる地域であった⁽²⁾。東大阪市域における大正3年の電動機の普及状況を見ると、表1に示される。楠根村や枚岡村での利用が顕著であった。枚岡村の伸線業における大正10年の原動機の利用状況を示す調査がある。それによると、台数的には、生駒山系の流水を利用する水車62台に対して、電動機は50台であった。それが大正13年の調査では、51対58という地位の逆転がみられた⁽³⁾。また、他村でも、大正10年頃になると、使用される電動機も大型化していた。たとえば木村織布工場（木村菊松・長瀬村）の二十五馬力電動機や白井製網所（白井孝一・長瀬村）、河内製網所（徳美寅松・長瀬村）の二十馬力電動機、日本製綿工場（山田武久・意岐部村）、宮本セルロイド工場（宮本一郎・長瀬村）の十馬力電動機等が稼働していた⁽⁴⁾。

表1 大正初期電動機の普及状況（大正3年）

村名	馬力				
	0.5	1.0	2.0	3.0	5.0以上
小阪村			1	1	
楠根村	5	6		1	4
玉川村	2		1		
北江村	5	1	2		
東六郷村	3	1			
西六郷村	1				
意岐部村	1	1		1	1
枚岡村	3		2	2	3
大戸村	4				
計	24	9	6	5	8

(注) 東大阪市の編纂委員会編『東大阪市の近代Ⅱ』304頁より引用

(1) 松下電器産業の社史は、「移転の意義」について、次のように記述している。「当時この方面は、大阪の「鬼門」に当たるというので、進んで進出してくる企業がなく、発展の遅れる原因になっていたが、所主は、「松下の門真進出が成功するかしないかは、迷信を打撃して、この地区を多くの企業が進出する土地にするか、鬼門恐るべしの迷信を深くさせるかの分れ道になる」として、全員の奮起を求めている」創業五十周年記念行事準備委員会『松下電器五十年の略史』昭和43年5月、110頁

(2) 東大阪市の編纂委員会編『東大阪市の近代Ⅱ』平成9年2月 297～298頁参照。

(3) 大阪府立商工経済研究所編『鐵鋼二次製品工業の実態—府下枚岡町の伸線業を中心として—』昭和28年2月 22～25頁参照。

(4) 中河内郡役所編『中河内郡誌』大正12年1月、169～171頁参照。

戦前昭和期の大阪府郡部の工業化について（衣本）

要するに、河内平野の大阪東部から生駒山西麓に至る地域—東大阪市域には、明治から大正にかけて、伸線、撚糸、金網、釘、理器等の生産活動が地場産業として一定の展開を見せており、新しい産業動力としての電力の導入が契機になって、この地域の工業化が加速されることになった。たとえば、表2をみよう。大阪府の工場数に関して、大正3年と昭和2年を比較すると、工場増加数は11367工場あり、その内の71.3%が大阪市内の増加分であった。中核都市・大阪への工場集積は強まる一方であったが、しかし増加率で見ると、中河内郡は大阪市をはるかに凌駕していたし、他の郡部にくらべても格段の違いがあった。それだけ中河内郡部への工場進出が顕著であったといえる。北河内地域のように松下電器や東洋紡績等の工場進出といった話題性には欠けていたが、特徴ある地域的な工場が点在し、多様な製品の生産活動が盛んになっていたと考えられる。その一翼を担ったのが東大阪市域の産業群であった。

表2 大阪工業の工場分布（地域別）

（単位：工場数）

	実数				増減（△）		増減率
	大正3年 （1914） A		昭和2年 （1927） B		B - A		$\frac{B-A}{A}$
総計	32,024 ^ロ	100%	43,391	100%	11,367	100%	35.5%
大阪市	12,138 ^ロ	37.9	20,246	46.7	8,108	71.3	66.8
豊能郡	4,885	15.3	3,440	7.9	△ 1,445	△ 12.7	△ 29.6
三島郡	2,924	9.1	4,910	11.3	1,986	17.5	67.9
泉北郡 ^ハ	4,281	13.4	4,593	10.6	312	2.7	7.3
泉南郡	2,877	9.0	3,069 ^ニ	7.1	192	1.7	6.7
北河内郡	1,595	5.0	1,596	3.7	1	0.0	0.0
中河内郡	675	2.1	1,541	3.6	866	7.6	128.3
南河内郡	2,649	8.3	3,996	9.2	1,347	11.9	50.8

備考) イ) 地域不明の工場が17あり、これを入れると32,041となる。ロ) 西成郡、東成郡の工場数を含む。ハ) 堺市の工場数を含む。ニ) 岸和田市の工場数を含む。

注) 1. 職工5人以下の工場を含む。

2. 大阪府立商工経済研究所編『発展過程よりみたる大阪工業とその構造』より作成

そこで、以下において、東大阪市域の工業化が昭和期においてはどのような地域的内容を持って展開したのかについて概観し、東大阪工業の戦前期の集積過程を明らかにしよう。

2. 中河内郡と東大阪市域の町村工業

明治20年代中頃の大阪府には、摂津に7郡、河内に16郡、そして和泉に4郡の27郡

が数えられたが、明治29年に、それらが9郡に統廃合された。即ち、摂津には、西成、東成、三島、豊能の4郡、和泉に泉北、泉南の2郡、そして河内に北河内、中河内、南河内の3郡であった。そしてこの中河内郡には、丹北郡、大泉郡、高安郡、河内郡、若江郡、渋川郡、志紀郡の三木本村が含まれていた。この内の河内郡、若江郡、渋川郡が現東大阪市域を形作ることになるが、大正14年当時では、この市域には次ぎの2町17村から構成されていた。布施町、小阪町、高井田村、意岐部村、楠根村、長瀬村、弥刀村、三野郷村、英田村、若江村、玉川村、東六郷村、西六郷村、北江村、孔舎衙村、大戸村、枚岡村、枚岡南村、池島村である。昭和に入ると、昭和4年に、枚岡南村と池島村が合併して、繩手村に、そして楠根村は楠根町になった。昭和6年には、東六郷村、西六郷村、北江村が一つになって、盾津村となり、そして、昭和8年に、布施町が高井田村を飲み込む形で合併し、町域を大きくした。この布施町が小阪町、楠根町、意岐部村、長瀬村、弥刀村と合併して、布施市となるのが昭和12年である。また、昭和18年には、玉川村および盾津村が町制を施行していた。戦前期の、この地域の町村形成の経過はこのような流れにある。

ところで、府県制が確立しているもとの郡制の実施は、財政基盤の弱さや伝統ある市町村行政との整合性の悪さから、発足当初から自治体としての機能においてのアイデンティティが弱く、その中途半端さがわざわざいって、郡制ははやくも大正12年に廃止される運命となった。そして、大正15年には、郡長や郡役所も完全に廃止され、実体がなくなったが、その後は、単なる地理的名称として用いられるにすぎなかった⁵⁾。たとえば、大阪府に関する統計において、上記でみたように、府下郡部ブロックとして7つの名称が通常用いられている—西成、東成両郡は大正14年4月に大阪市の市域拡張のため大阪市に編入される—。

したがって、戦前期の大阪府郡部の調査報告や統計は三島、豊能、泉北、泉南、北河内、中河内、南河内の7ブロックにおいて示されることが多いのである。言い換えれば、7ブロックに関する統計的数値は公表されている統計書等より容易に抽出（検索）できるが、逆に、市町村レベルでの工場数や生産額といった統計資料の公表はほとんどないという状況下にある。このような状況下において、この時期の市町村単位での工場分布が把握できる唯一の資料といえ、商工省編纂の『全国工場通覧』が揚げられる⁶⁾。ここには、昭和4年から14年までのものが収録されているが、その内容は、現在の『工業統計表』のように全国または都府県単位での工業活動の数量的把握を目的とした統計的資料とちがって、

5) 藤本篤・前田豊邦・馬田綾子・堀田暁生著『大阪府の歴史』山川出版社、1996年11月 266～268頁、および前掲『東大阪市史 近代Ⅱ』19～20頁、参照。

個々の工場の所在地を明記するとともに、その代表者、創業年月、主要生産品目を掲載する名簿的役割にある。したがって、どのような産業やどんな工場が市町村レベルで存在するのかを検索することがそこから可能になる。

東大阪市域の町村の昭和初期の工場分布を『全国工場通覧』より作成しよう。それが表3である。昭和4年12月末に、197工場（5人以上の職工を使用する設備を有し、又は常時5人以上の職工を使用する工場）の存在が確認できた。業種的には、「その他の工業」が最も多く、55工場となる。これは釧の製造に従事する工場が55工場の内、25工場を占める、中河内郡での一大産地を形成していたからである。次いで靴下や手袋等のメリヤス製造加工（19工場）、撚糸（9工場）が中心の紡織工業（51工場）、鉄線・針金（18工場）、金網（10工場）、鋳物（9工場）の金属工業（42工場）、腕輪や歯ブラシ等のセルロイド製品（15工場）とゴム風船（5工場）が中心の化学工業（32工場）の順である。雑工業が多いことも、日用品の製造や加工が中心であることも、大都市の消費生活や輸出に関連した大阪近郊の工場群の在り方がそこに感じられる。また、金属工業はこの地域のいわゆる「金偏」地場産業の発達を示すもので、この地域の土地柄を顕著に示す要因である。一逆に北河内や南河内では多くみられる食品工業が一つも抽出されなかったことも同様に特筆に値する特徴である。—

ところで、基準となる5人の職工を雇用している「経営規模」はこの当時の郡部では大きな規模で、少数であった。たとえば、枚岡伸線業をみると、昭和2年の工場数は60で、そこに225人の職工が働いていた。1工場当り約4人となる。その2年後の6年には工場数が70となり、職工も350人になった。この時点で1工場当たり5人という計算になる⁷⁾。昭和4年の枚岡伸線業の場合、『全国工場通覧』に掲載されているのは、僅か14工場である。また高井田村の村誌によれば、昭和4年の同村の工場数は210と記載されている⁸⁾。それに対して、『全国工場通覧』からの高井田村の抽出分は僅か12工場となっている。大半の工場が条件的にザルの目からこぼれ落ちていることになる。このことは他の町村にお

6) 本稿に用いた『全国工場通覧』は柏書房により、復刻されたものである。原本は昭和6年版（収録：昭和4年末現在）から16年版（収録：昭和14年末現在）までの11巻からなるが、復刻版は23巻に分冊されている。その第1巻、「解題」のなかで、その資料価値について、次ぎのように解説されている。政府（農商務省）の『工場統計表』や各府県の『統計書』には、個別工場についての記載はほとんどないが、本書は各個別工場を工業種類別・府県別に分類してイロハ順に掲載していることから、「各府県・郡市町村でどのような工業が存在し、それらがどのように発展したのか、またいつ消滅してしまっただかを個別工場にまで立ち入って検討しようとする上では唯一のものである」後藤靖・下谷政弘「解題」『全国工場通覧1』柏書房、1992年10月、参照。我々の関心を強く引いたのは、市町村内工場を抽出するのに必要な住所が村及びその「大字」まで記入されていることであった。

7) 前掲『鐵鋼二次製品工業の実態』19頁参照。

8) 布施町誌編纂会『布施町誌 統編』昭和12年9月、254頁、参照。

表3 東大阪市域の市町村別工場数の推移

(年末現在 工場数)

		布施町	高井田村	小阪町	意岐郡村	楠根町	長瀬村	弥刀村	三野郷村	英田村	若江村	玉川村	東六郷村	西六郷村	北江村	孔舎衛村	大戸村	枚岡村	繩手村	計	構成		
																						(%)	
昭和4年	A 紡織工業	5		5	2	3	4			4	4	2	2	11	3	2		2	1	50	25.4		
	B 金属工業	5	6	4	3	1		4		1					1	1		15	1	42	21.3		
	C 機械器具工業	2													1			2	6	11	5.6		
	D 窯業	3				1														4	2.0		
	E 化学工業	18	2		2	2	1		2	1	1							1	3	33	16.8		
	F 製材及木製品工業		1			1														2	1.0		
	G 印刷及製本業																						
	H 食品工業																						
	I ガス及電気業																						
	J その他の工業	9	3	1	2	11				13	4	7	3		1					1	55	28.3	
	計	42	12	10	9	19	5	4	15	10	12	5	2	12	5	3		20	12	197	100.0		
昭和8年	A	布施町	3	5	2		6			5	1	2	盾津村	10		2		1	3	40	17.2		
	B		23	5	2	4	1	5	1		1			1	1		19	3	61	26.3			
	C		14	2	2	1	2					1			1		1	5	30	12.9			
	D		2			1									1					5	2.2		
	E		24	2	1	2			1	1							1	4	36	15.5			
	F		1			1														2	0.9		
	G		1																	1	0.4		
	H			1			1													2	0.9		
	I				1																		
	J		19	3	2	11	1		10	5	1	1			2							55	23.7
	計	87	18	9	21	10	5	10	13	3	5		14		3		22	12	232	100.0			
昭和12年	A	布施市			37					5	1	1		14		4	1	2	4	69	9.9		
	B				143					1	1	1				4	2	79	15	246	35.2		
	C				89					1						1	1	6	11	111	15.9		
	D				5															6	0.9		
	E				100				6			1					2	3	10	122	17.5		
	F				7															1	8	1.1	
	G				1															1	3	0.4	
	H				4												1			1	5	0.7	
	I																						
	J				69				18	7	5	9		1			2	9	9	9	129	18.5	
	計			455			24	14	7	12		18		9	9	100	51	699	100.0				

(注) 1. 5人以上の職工を使用する設備を有し、又は常時5人以上の職工を使用する工場

2. 商工省編纂『全国工場通覧』（復刻版：柏書房）より作成

いても同じであると考えて間違いないであろう。したがって、事業所数的にははるかに多いといえる、5人未満の小さい規模の工場や、農家副業が調査の対象外として処理されていることは、この地域の工業活動の実勢を正確に反映させているとは言えないが、上記197工場が意味のない存在であるというものではない。当時としては地域を代表する存在であると言い換えることができる工場群であり、これらの工場の活動内容や歴史に加えて、197の分布する地域を鳥瞰することから、当時のこれら地域における工業化動向に対して、一定の具体的な判断が可能であるといえよう。この資料を通してしか知り得ない実態がそこにあるといえる。

3. 昭和初期の町村別工場分布

東大阪市域の各町村別に分布する工場の工業活動に関して、世界恐慌の直前の現状を以下において把握しておこう。

布施町（大正14年4月1日町制施行）

42工場の内、西脇硝子工場（創業・明治43年）、伊東製綿工場（大正2年）、高浦貝釘工場（大正5年）を除けば、大半の工場が第一次世界大戦後、特に大正末から昭和初期を創業としている。それだけ工業地形成の動きは若いといえる。業種的には、化学工業部門の工場が18工場と最も多いが、大消費地であり、貿易都でもある大阪に近接した地の利を立地条件とする日用品雑貨型加工産業が中心で、櫛、腕輪、洋傘柄等を製造するセルロイド工場が8工場（川崎・井上・天野・浜田・上田・辰己・神原・藤間）を占め、次いで襖紙や化粧紙の紙加工の4工場（池田・監尻・東和・岡本）、子供玩具のゴム風船の3工場（倉橋・松永・杉原）の順であった。雑貨型製品が中心の化学工業に次いで9工場と多かったのは、「その他の工業」であるが、同様の傾向が読み取れる。貝釘（竹本・高浦）や水牛釘（吉川）、運動靴（尾崎足袋）、造花（丸山美術）、人造真珠（竹本）といった輸出向け製品がつくられていた。また、紡織工業、金属工業も、いずれも5工場を数えるが、足袋（三好足袋）、肩掛レース（大阪刺繍）、風呂敷（不破染）、鉄瓶（小川・辻西・菊田）といった日用品の生産が中心であった。もっとも、綿打ち（伊東製綿）、綿糸晒し（福西）等の紡織関連の工程や、針金（吉田鍍金）や金網（鳴門）等の中間財の生産に従事する工場もあった。

高井田村

12工場の内、龍文堂鑄造所（創業・明治45年）、富士鑄造所（大正6年）を除けば、大半の工場が第一次世界大戦後、特に大正末から昭和初期を創業としている点では布施町と同じである。特に8工場が昭和に入ってから創業である。業種的には、鉄瓶や機械部品等の金属製品を生産する鑄造所4工場（龍文堂・富士・西野・特田）、セルロイド製の日用品を製造する2工場（上野・前田）、木箱（辰己木工）、造花（中西造花）、洋服（荒海ミシン）、布の防水加工（阪田）等の雑多の生産活動もみられ、そこには大阪近接という立地条件において布施町とも通じる側面がうかがえる。また、生駒山麓で発達していた鉄線加工業（合同電気）と、その関連産業といえる針金メッキ工場（昭和亜鉛鍍金）のこの地域での活動が確認できる。

小阪町（大正14年4月1日町制施行）

10工場の社歴は布施町の場合とは対照的で、前田金網工場（大正10年）、岸田撚糸工場（大正11年）を除けば、明治中期から第一次世界大戦までに創業している。明治期では、西野織布工場（明治18年）、北尾金網工場（明治37年）、林金網工場（明治40年）の3工場があり、大正期では、5年を創業と記すのは4工場（中村織布・大西メリヤス・久貝金網・上田釦）であり、6年は岸本撚糸工場である。業種的には、紡織工業は綿撚糸工場2、厚司や足袋底をつくる織布工場2、メリヤス工場1から成る。金属工業は4工場とも金網の製造であり、金網工業の中心地であることがうかがえる。釦工場（その他工業）は1である。撚糸や織布工場は河内木綿を伝承する関連産業としての地域展開を形作っていたが、特に西野織布工場の西野宗七は河内木綿の特性に適した雲斎織の推進者であった。また、北尾金網工場と林金網工場はこの地での金網製造を最初に手掛けた工場である。金網製品はこの頃には大阪の輸出商品の一つになっていたが、国内においても、当時次第に用途が多様になり、市場の拡大に対応して金網織機が工夫され、機械生産への展開が中心になり、地場産業としての新たな地域展開が本格化しはじめていた。

楠根町（昭和4年10月15日町制施行）

社歴の古い工場が比較的多く、19工場の内、明治期の創業が9工場である。また大正7年の樋口貝釦繰生地製造所を除けば、大正10年代が7工場、昭和が2工場と新しい動きも示している。業種的に特色があるのは、貝釦の製造（宮野・前島・樋口・川楠・

馬場・石井・西田）である。これは撚糸、金網、伸線等と同じ様に、明治期に大阪より伝わり、この地域の農家余業を核に発達し産地化していったものである。宮野貝釦製造工場（宮野佐吉）は明治40年、そして前島貝釦製造工場は明治44年を創業としている。大阪府の『府下農村ニ於ケル副業的加工业ノ概況』（昭和4年）によれば、「貝釦ノ製造ハ大阪市天王寺町付近ガ元祖ニシテ数十年前ヨリ之ガ製造ニ従事セリ。然ルニ大阪市ノ発展ニ伴ヒ地代職工賃ソノ他諸経費漸次高マリ経営難ニ陥リ、漸次農村ニ移リ各地ニ於テ之ガ製造ヲ為スニ至レリ。中河内郡楠根村ニハ今ヨリ約二十年前同地ノ人宮野某氏大阪府ニ於テ之ガ技術ヲ修得シ製造ニ着手セルニ始リ、爾後年ト共ニ製造家ヲ増加セリ。近時ノ情勢トシテハ従業者ハ漸次農村ニ移リツヽアリ」と記す⁹⁾。他の5工場の内4工場は大正期の創業であり、西田貝釦織生地製造所が昭和2年と最も若い創業である。

これら貝釦の生産を除けば、生産品目は多様である。マッチ（近藤燐寸製造所）、ハンカチ（山内ミシン工場）、ロープ（村井製網所）、家具（泉家木工所）、万年筆（稔野セルロイド工場）、罎埴（日本罎埴株式会社）、金網（坂本金網工場）、導火線（日本導火線会社）、浴布（石田タオル工場）、天笠（東崎メリヤス工場）、フェルト（国産フェルト研究所）、押紙（渡辺押紙加工所）が挙げられる。その意味では、布施町以上に、古くて、多様な工場の活動が展開していた。

なお、多様な工場活動のなかでは、金属の溶融や加熱に必要な器具である罎埴の製造に従事する日本罎埴株式会社の大坂拠点造りが始まっていたことに注目される。この業界は重化学工業の発達や、戦争に敏感に反応するだけに、日露戦争や第一次大戦は大きな転機となった。たとえば、日露戦争後、大日本罎埴製造所、帝国罎埴、大阪罎埴が合併して、日本罎埴株式会社が誕生したが、大戦ブームを契機に、大正8年に楠根村の稲田に新工場を建設していた。そして、大戦ブームの反動不況が現れ始めると、同社の積極経営は大きく後退させられたが、東京工場が関東大震災により被害を受けたことから、昭和の初めには、この大阪工場が主力工場として稼働するようになっていた¹⁰⁾。

意岐部村

この村は北に楠根町、南に小阪町に接し、西には布施町、高井田村が位置している。いわゆるこの当時の大阪都市圏のインナーリングの東部に隣接する近郊農村部にあっただけに、この時期の工業化の波を身近に感じる位置にあった。9工場の内、6工場が昭

(9) 近畿大学商経学部・関西経済研究会編『地域経済と企業者精神』1996年3月、8～9頁参照。

(10) 武知京三著『近代日本と地域産業』税務経理協会、平成10年10月、80～83頁参照。

和期の創業であり（昭和3年：草開製綿・豊田製綿・中島整毛，昭和4年：南野鋳物・東洋文具・原田製膠），残り3工場の中の2工場（恒川金具・大村藝口口金鍍金）も大正15年創業という若さであった。吉岡製膠所は明治29年創業であり，中河内郡のにかわ製品は主に晒し用にかわであったが，ここではマッチ用にかわや，絵具用にかわを生産していた。

三野郷村

明治22年5月を創業とする寺西製網所（寺西治三郎）が水牛釘の製造とともに，ハンモックの生産を最初に始め¹¹⁾，当初は「輸出ノミノ制作ナリシガ，以来販路拡張ヲ計リ，現今ニ於テハ日本全国ニ販売スルニ至レリ」という。販路の拡張に伴い，寺西源三も大正8年に寺西製網所を創業し，ハンモックやネットの生産に従事している。この2工場で昭和の初めには従業者も190人を数えた。さて，15工場の内，釘の製造に従事している工場は6工場と最も多い（辻井・西尾・吉田・岡本・貝堀・阪本）。貝釘の吉田釘工場を除けば，他の工場は全て水牛釘である。また創業的にみれば，坂本釘工場（大正12年）を除けば，他の工場は全て第一次世界大戦以前の大正初期の創業である（大正2年：辻井，3年：西尾・吉田，4年：岡本，5年：貝堀）。前掲の『府下農村ニ於ケル副業的加工業ノ概況』によれば，水牛釘の生産は「今約参拾年前大阪市ニ於テ起リ，中河内郡各地ニハ二十年前ヨリ普及シ，大正八，九年好況時代ニ於テ急激ニ増加シ，其後多少減少セシモ現在ハ亦稍増加ノ傾向ニアリ」と記されているが，同村ではブーム以前の事業化が見受けられることになる。この釘の製造に次いで，多いのがブラシの生産に関連する豚毛の整毛，漂白に従事する整毛所である。松本（創業・大正4年），林（同5年），沢田（同7年），大正14年創業の増田，樋口の5工場があった。

若江村

若江村は，小阪町とともに，明治期に，河内木綿を伝承する雲斎織の中心地となっていたが，厚司の織物加工としての足袋の製造がファッションの洋風化とともに衰退し，代わって靴下製造がこの地域においてみられるようになっていた。松村（創業・大正5年），武藤の2靴下工場があった。しかし，雲斎織が全く衰退したのではなくて，雲斎の森田織布工場（森田仙次郎）が，メリヤス加工品の三上商会（製織部），靴下の武藤の2工場と同様に，昭和3年に創業されている。そして，この時期の村を代表した工業

(11) 前掲『東大阪市史 近代Ⅱ』189頁参照。

活動は釦の製造であった。

12工場の内、5工場（北口・清野・上野・石田・萩原）が釦の製造に従事していた。この村では、楠根町のように貝釦織生地製造ではなくて、紐釦、ナット釦、水牛釦を主な製品としている。北口釦工場（大正2年）と清野釦工場（大正3年）は紐釦の生産であり、ナット釦は石田釦工場（大正12年）と萩原釦工場（大正14年）であった。大正10年創業の上野釦工場だけが水牛釦の製造であった。中河内地域での釦生産に関しても、第一次世界大戦以前には水牛釦の生産が盛んであったが、大戦後は、ナット釦の生産が主流になっていたといわれる。なお、若江村の東南に近接する三野郷村が上述したように水牛釦の製造の中心であったことに加えて、それらの工場の創業が大正の初めに集中していることを勘案すれば、三野郷村に対して若江村は釦生産に関して新展開地であったといえる。

西六郷村・東六郷村・北江村

これら三村は昭和6年4月には合併して、盾津村になるので、ここでは一地区として記述する。最も工場数が多いのは西六郷村であり、タオルからメリヤスへの転換による産地形成が進んだ地域で、13工場を数える。植田釦工場（大正12年）を除けば、全てメリヤス工場である。メリヤスと表示される製品の多くは手袋、靴下であった。東六郷村の2工場（巽・西村）もメリヤス生地の生産に従事している。創業的にいえば、西および東六郷村のメリヤス工場13の内、7工場（西田・多田・堀池・若松・好川・東野・巽）が明治40年代の創業であり、大正に入っては、大正2～4年が3工場（松本・西村・谷口）である。第一次世界大戦後の創業は3工場（今林・寺北・吉田）で、その内昭和期は吉田メリヤス（昭和2年）だけであった。早くから工的活動が根付いたメリヤス村であった。また、北江村の5工場の内、3工場が繊維関連であり、タオルの北村織布、敷布の北橋織布に対して、メリヤス製肌着を製造する川上工場がある。したがって、三村のメリヤス工場は東六郷村の編立業と、西六郷村、北江村での縫製部門を合わせ持つメリヤス加工が中心であった¹²⁾。なお、北江村の非繊維部門の2工場は謄写版やインクの生産に従事する不二版合資会社（大正10年：佐々木多吉）と、第一次世界大戦の軍需ブームに刺激された長栄館増埒製造所（大正2年：長谷川亀吉）である。

12) 前掲『近代日本と地域産業』49～51頁参照。

長瀬村と弥刀村

長瀬村は布施町に南接し、弥刀村は小阪町に南接する。両村は長瀬川を挟んで隣接している。地理的に一帯観のあるところである。工場数は長瀬村の5に対して、弥刀村は4工場と同程度である。異なるのは長瀬村はセルロイド工場（大正12年：宮川恒蔵）を除けば、紡織工業であり、宮島（明治44年）、西尾（明治45年）、高田（大正5年）の3燃糸工場と雲斎の木村織物工場（明治41年）からなる。前述の大阪府の調査によれば、農家副業としての燃糸産地は長瀬村以外では、弥刀村、三野郷村があげられていたが、この『全国工場通覧』には、そのような傾向は伺えない。三野郷村が釘工場に代表されるように、弥刀村の4工場は金網工場であった。西村金網（西村吉松）、林山福金網、関谷金網は共に第一次世界大戦後の大正9年の創業であり、西村金網（西村作治郎）は大正12年であった。弥刀村の工場立地は小阪町の金網工業の展開と一帯的にとらえられるものである。

枚岡村

この地域においては、「天保年間ヨリ水車ヲ利用シ針金ノ製造ヲ為セシガ、明治時代ニ入り其ノ需要漸次増加シ電気動力ニ依リ、之ガ製造ヲ為スニ至リ、欧州戦争当時好況ニ乗ジ製造家ノ数ヲ急激ニ増加セリ」と先の大阪府の調査は記載している。大正8年には、工場は72を数え、職工数も290人になっていた。大正4年が工場数35、職工数104人であったことから、わずか4年で産地規模が2倍以上に拡大していたことになる。その産地の昭和4年の『全国工場通覧』に掲載されている工場数は20である。その内、14工場が鉄線や真鍮針金の製造業であり、伸線業の村であることはこの点からも伺える。しかし、それ以外の工場もある。厚司地を製造する中村織布工場、と鉄川製綿工場、傘の骨の製造に従事している秋山洋傘製造所、革製品製造の黒田パットレザー製造所、そして西田工場、岡田工場はシャフトを製造していた。創業的には、伸線業の山中（明治19年）、松本（明治25年）、西村（明治35年）を除けば、他はすべて大正年間に創業されている地場産業形成の村である。

繩手村（枚岡南村と池島村が昭和4年4月合併）

12の工場の内、5工場が理髪用ジャッキ・バリカンを製造していた。村の産業の成り立ちについて、先の大阪府資料は次のように述べている。「今ヲ去ル三十四、五年前伊藤氏ハ大阪市ニ於テ之ガ製造ヲ為シ居レル。当時繩手村樋口氏ハ一職工トシテ伊藤氏ノ工場ニ於テ働キ居リシガ、約二十年前郷里繩手村ニ帰り之ガ製造ヲ為セルニ始マリ、漸

戦前昭和期の大阪府郡部の工業化について（衣本）

次ニ製造家ノ数ヲ増加セリ」。この樋口工場から職工が独立し、新たな工場が興された。明治42年の福田ジャッキ製造所（福田嘉治）、南谷ジャッキ製造所（南谷丑松）、大正2年の川上ジャッキ製造所（川上福松）、大正9年の希有ジャッキ製造所（希有宗太郎）、そして地引為次郎が上述の伊藤氏（伊藤兼吉）と図って、日本理器株式会社を興したのが、大正12年のことである。なお『全国工場通覧』には、樋口工場の記載はない。

理器の製造以外の特色のある社歴の古い工場があった。サンドペーパーを製造する市口ペーパー製造工場（明治30年）と永塚ペーパー製造工場（明治32年）および義手義足の製造に従事している土居義一肢矯正専門技術研究所（明治43年）がそれである。また、近隣町村に展開していた業種も見られた。歯ブラシ柄を製造する中川セルロイド工場（大正14年）、辰己紙箱製造加工所（大正15年）、鉄線の室田伸線工場（昭和3年）は若い工場であり、帆布の松岡織布工場だけが、大正元年の創業であった。

英田村と玉川村

両村は東大阪市のほぼ中央部に位置する地域であり、北にメリヤス村（西六郷村・東六郷村）、西にセルロイド加工とニーズの多様化に対応した都市型工業が展開する布施町や高井田村、そして釦の産地形成がみられる楠根村がある。また、南には釦の生産とともに、整毛所が発達していた若江村、三野郷村に接していることを反映して、工場の種類も多様である。英田村の10工場の場合、吉邨卯之助、吉邨豊吉の撚糸工場2、歯刷子毛植工場2（里村・村野）、靴下編立工場2（大友・宮崎）と岡田メリヤス針製造工場、市富セルロイド工場、北島藤細工工場、清水紙加工工場があった。玉川村の5工場は撚糸工場2（奥田・河内）、釦工場2（萩原・杉山）、歯刷子細工工場（林）からなる。明治11年創業の河内撚糸工場を除けば、他は第一次大戦後の創業であり、そこには、周辺町村からの影響が感じられる。しかし、東の伸線業の枚岡村、理器製造の縄手村との繋がり業種的にはみられなかった。

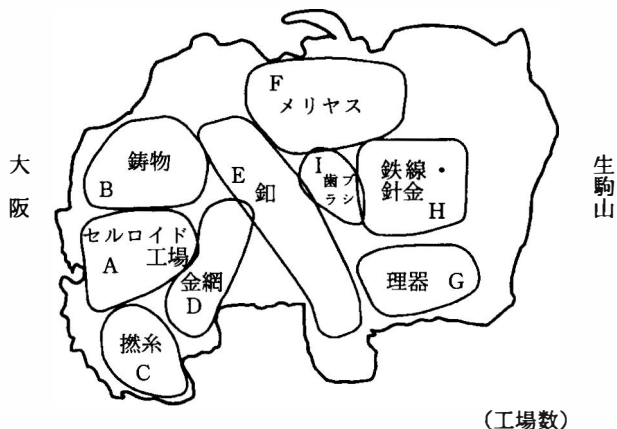
孔舎衙村と大戸村

両村は東大阪市の北東部生駒山麓に位置する地域である。大戸村は北に孔舎衙村、南に枚岡村に接している。大戸村は優良な住宅地としての開発が進んでいて、工場の進出を積極的には歓迎しなかった。すでに大正6年には、枚岡村の針金工場の公害（河川の水質汚濁）に注目して、「針金工場設置不許可」を決定している程である¹³⁾。そのことを反映して、『全国工場通覧』には、掲載された工場は一つもなかった。したがって、孔

13) 前掲『近代日本と地域産業』61頁参照。

舎衙村は西側に位置するメリヤス村（西六郷村・東六郷村）との繋がりが主に考えられる程度で、工場数も3工場と市域内では最も少なかった。靴下製造の原田メリヤス工場、中人綿製造の浅田製綿工場、そして織物機械の谷口製造所である。

図1 昭和初期の東大阪市域の工業分布（昭和4年）



- A. 布施町 セルロイド工場 (8)
- B. 高井田村 鋳物工場 (4)
- C. 長瀬村 燃糸工場 (3)
- D. 小阪町・弥刀村 金網工場 (8)
- E. 楠根町・若江村・三野郷村 釘工場 (18)
- F. 東六郷村・西六郷村・北江村 メリヤス工場 (9)
- G. 繩手村 理器工場 (5)
- H. 枚岡村 鉄線・針金工場 (14)
- I. 英田村・玉川村 歯ブラシ工場 (3)

最後に、以上のように概観してきた町村の工業の特色を工場数が最も多い業種を考慮して、当時の町村図に描き下ろした産地概観図が図1である。そこには、現東大阪市域の昭和初期の工業展開は次ぎのような二様の動きを特色としていた。即ち、

1) 伝統的な明治以来の地場産業的展開が地の利や地縁・血縁的繋がりによる技術の習得や労働力の確保が重要な条件となって、農村地域の点的広がり状況一村単位的産地形成一が進んだことが考えられる。たとえば、地の利の典型は生駒山系の流水を利用する水車工業の伝統を継承する枚岡村の伸線業である⁹⁾。また、地縁・血縁的繋がり of 典型例としては、金網工業や理器工業が揚げられる。金網工業の場合、大阪立売堀の金

(14) もっとも、電動機の普及により、工業立地の拘束性が著しく緩和された後も、工場集積がみられたのは、この地に培われた「線引き」なる職人の伝統的な技能に負うところ大であるという。この特殊技能の温存を可能にしたのは、「業者間における地縁的、血縁的な紐帯、親方、職人の封建的な結びつき」による排他性が指摘されている。枚岡の線屋は無論のこと、布施やその他の地域で伸線業を営む事業主の多くが枚岡村出身であるが特殊技能の継承という点から意味のあることと指摘される。この特殊技能は電動機の普及に合わせて近代的な工具である合金ダイスが一般化することによって（昭和10年頃から）力をうしなっていくのである。（前掲『鐵鋼二次製品工業の実態』16～17頁参照）

戦前昭和期の大阪府郡部の工業化について（衣本）

網製造卸業の「斎藤商店」に働いていた藤川という小阪村出身の職工が織編技術を習得したのち、独立したが、そこに同村出身の青年が徒弟奉公し、技術習得後、帰村し、農家の納屋で金網の生産を始めたのが小阪村での最初であるという。独立自営業者にとっては、安い労働力の確保が、徒弟奉公にでる農村出身者からいえば、安心して技術の習得ができるという関係であった。農村部への都市化、資本主義化の浸透は農業以外の労働や現金収入の道を求める部分を以前より多くして、先の関係をテコとして、工業活動が村社会の中にもちこまれ、兄弟の暖簾わけや職工の独立という形で産地化していった。このような関係が縄手村の理器製造業でもみられた。

表 4 町村別工場の創業年の特徴

町村名	時期	大正			昭和 (1～4年)	特徴
		明治	(1～7年)	8年以降		
布施	1	2	24	15	大正8年以降	
高井田	1	1	2	8		
小阪	3	5	2	0		
意岐部	1	0	2	6		
楠根	9	1	7	2		
長瀬	3	1	1	0		
弥刀	0	0	4	0		
三野郷	1	8	4	2		
英田	1	2	4	3		
若江	0	3	6	3		
玉川	1	0	3	1		
西六郷	6	2	3	1		
東六郷	1	1	0	0		
北江	0	1	3	1		
孔舎衙	1	2	0	0		
縄手	5	2	4	1		
枚岡	4	9	7	0		

(注) 前掲『全国工場通覧』より作成

2) 大阪に近い、布施町、小阪町、高井田村、意岐部村、楠根町、長瀬村、弥刀村といった町村（昭和12年に合併して布施市なる地域）の工場数は多い。197工場の内、約半分に当たる101工場がこの地域にある。布施町のセルロイド工場の集積や、造花、人造真珠、襖紙、風呂敷、鏡等の雑多な物を製造する都市型工場も多いのである。これらの多くは大阪からの越境型工業である。前節でも触れたように、雑工業が多いことも、日用品製造加工が中心であることも、大都市の消費生活や輸出に関連した大阪近郊の工場群の在り方がそこに反映され、大阪からの工業化の波が西から東へと浸透し始めていたことを伺わせる。たとえば、セルロイド工場は英田村や縄手村においてもみられるようになっていた。また、創業年をみたものが表4である。第一次大戦後、とりわけ大正末期から昭和にかけての創業がみられる町村は西から中部地域の町村であることを示している。要するに、新しい工業展開力は布施、高井田、意岐部村を中心に、若江、英田

村等に波及し始めていたといえる。言い換えれば、新しい工業化の波が、西から東へと浸透し始めていることの一部を説明している。

3) 工場数に関していえば、最多の業種は55工場の「その他の工業」であり、次いで紡織工業の50工場であった。両者を合わせた105工場は全体の53.3%を占め、機械・金属・化学の86工場を凌駕している。昭和4年当時では、軽工業が中心であったということになる。

4. 大阪工業の構造転換と町村工業の動向

図2は大正14年を基準とする世界恐慌前後の昭和期の大阪工業の生産動向を示している。そこからは、つぎのようなことが読み取れる。

即ち、1) 各種工業の活動は総じて昭和5年の世界恐慌後の二、三年の低迷を経て、上昇傾向を示している。

2) そのなかでも、機械及器具工業が最も力強い成長力を有している。これについては、当時の『大阪府勢要覧』は次のような産業動向を指摘している。「各種製造工業の勃興、交通機関・土木建築事業の発達、電気事業の進歩等のため機械器具類の需要激増し、これ等輸入に刺激せられて、国内製造業の勃興を促し、府下に於て各種の機械器具工業連りに興り、技術の進歩見るべきもの少なからず」と大阪における工業化高度化への動向を指摘している。¹⁵⁾

3) それに対して、繊維（染織）工業、飲食物（食料品）工業、雑工業（その他の工業）といった軽工業部門の生産額の推移はすでに停滞的な傾向に陥っていた。特にかって大阪工業の大宗であった繊維工業の場合、その生産動向は機械器具工業の力強さとは対照的であった。

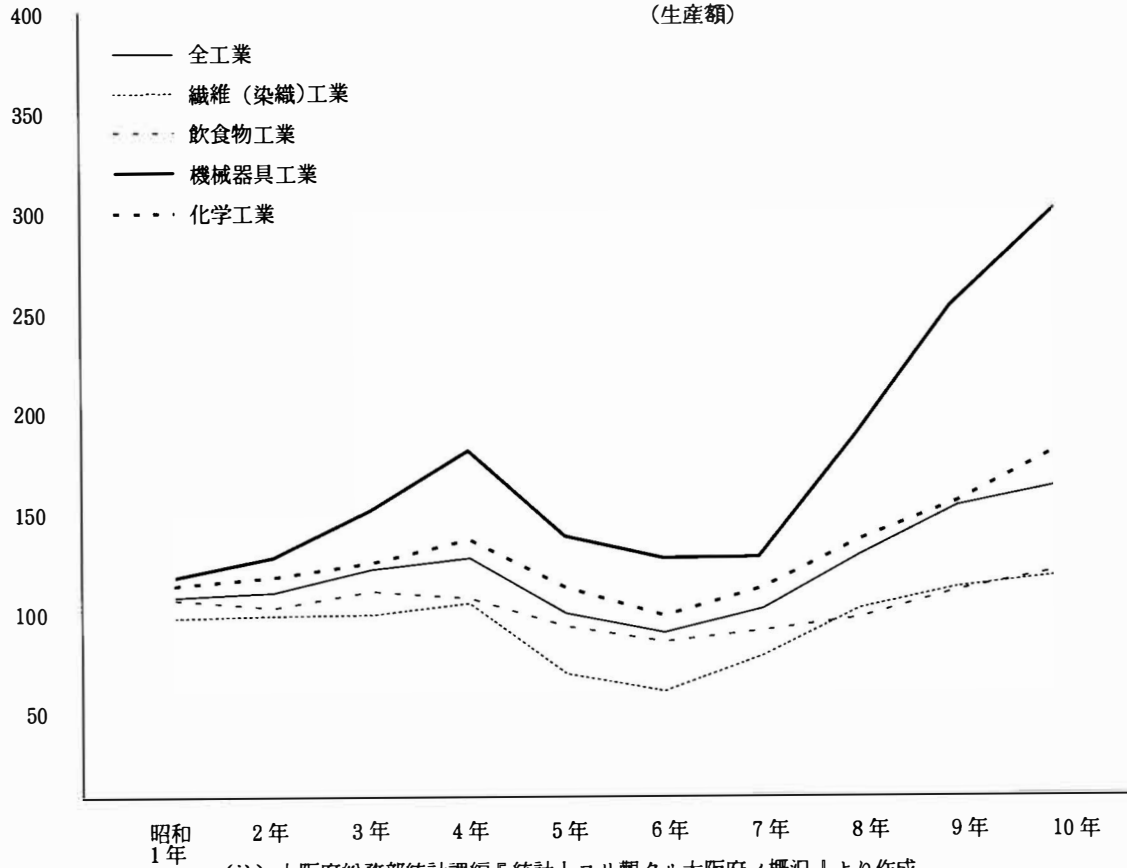
ところで、菅野和太郎の『新大阪論』は次のような書き出しで始まっている。「第一次欧州大戦後大阪は異常なる勢ひを以て発展し、一時はその経済上の実力が東京をも凌ぐ有様で、我国産業の一大中心地たる勢威を有して居た。従って『大阪は我国の心臓である』と迄称せられ、江戸時代『大阪は天下の台所』と称せられたことと対比せられるに至った。事実我国に於て産業都と言へば直ちに大阪が指摘せられ、政治都の東京と相対立して居たものである¹⁶⁾」。確かに、“東洋のマンチェスター”と呼ばれた大阪は綿工業が発達して、昭和に入ると、30万本のエントツが林立する“煙の都”ともよばれ、“政治は東京、経済は大阪”と言われるようになっていた。昭和6年には、全額市民の寄付による大阪城天守閣の再建を果たし、「御奉行の名さえも知らず年くれぬ」という江戸の昔よりの大阪商人の気風が思い起こされるほどで、「わが国経済の中心地たること」の自負が「大大阪」と呼ばしめた¹⁷⁾。

(15) 大阪府『大阪府勢要覧』昭和4年5月、92頁参照。

(16) 菅野和太郎著『新大阪論』全国書房、昭和17年4月1頁参照。

(17) 宮本又次著『大阪発達史』大阪府史編纂資料室、昭和36年1月63頁参照。

図2 大阪府の工業生産動向（大正14年 = 100）



戦前昭和期の大阪府部部の工業化について(衣本)

表5 大阪府の工業構造

(所, 千円)

	昭和5年				昭和10年			
	工場数		生産額		工場数		生産額	
紡織工業	1,879	23.9	274,879	29.5	2,197	17.5	443,323	25.8
金属工業	1,212	15.4	135,254	14.5	2,116	16.8	396,911	23.1
機械器具工業	1,107	14.1	133,783	14.3	2,392	19.0	282,210	16.4
化学工業	674	8.6	164,717	17.7	922	7.3	273,681	15.9
窯業・土石	315	4.0	26,502	2.8	385	3.1	50,741	3.0
製材木製品	378	4.8	21,451	2.3	639	5.1	27,115	1.6
印刷製本	315	4.0	44,949	4.8	469	3.7	48,113	2.8
食料品	880	11.2	79,884	8.6	1,056	8.4	97,354	5.7
その他工業	1,118	14.2	51,296	5.5	2,404	19.1	99,313	5.8
	7,878	100.0%	932,715	100.0%	12,580	100.0%	1,718,761	100.0%

(注) 1) ガス, 電気を除く, また, 生産額には「加工賃及修理料」は除く。
 2) 大阪商工経済研究所編『大阪経済の基本統計』より作成。

表6 大阪・東京の対全国比 (昭和10年)

(単位: 所, 人, 千円)

	大阪		東京		全国	
		対全国比		対全国比		構成比
工場数	12,591	14.8%	13,116	15.4%	85,174	100%
職工数	328,283	13.9%	304,393	12.8%	2,369,277	100%
生産額	1,848,248	17.1%	1,526,663	14.1%	10,836,894	100%

(注) 前掲『大阪経済の基本統計』より作成

表5は昭和5年と昭和10年の工業構造を比較したもので, 次のような構造的変化が指摘できる。かつて大阪工業を代表していた繊維産業の総生産額に占める大きさはこの時期には大正期よりはるかに小さなものになっていた。昭和10年の生産額では, 繊維は第1位の地位を維持していたとはいえ, 繊維にほぼ同じぐらいに拡大した金属をはじめとする機械及び化学の総計としての重化学工業部門の大きさは昭和5年の46.5%から昭和10年の55.4%へと拡大していた。工場数でも, 38.1%から43.1%に拡大していた。工業構造の高度化がこの次期に確実に進展していたことを物語っている。昭和10年の対全国比でみた大阪と東京を比較すると, 工場数では, 東京が優位にあったが, 職工数と生産額では, 東京を引き離して, 大阪が第一位の地位を維持していた(表6参照)。

しかし, 日中戦争が勃発した昭和十二年頃よりは, 政府の統制が強まり, 大阪経済の自由な伝統にも陰りがみえはじめ, 「東京の経済力が断然優位を示し, 最早大阪は到底東京に及びもつかない観がある」と菅野も『新大阪論』のなかで述べている。事実, その後の両者の動向は逆転していくことになるが, 日本経済が軍国主義の台頭を背景に重化学工業を中心とする新たな工業化を急展開させ, その後, 東京への求心力が政治的にも, 経済的にも形作られ始めていたといえる。言い換えれば, 日中戦争前の昭和前期は経済力において大阪の優位がうかがえた時期であり, 構造転換への過渡期であったといえる。それはまた産業的運命に直面していた時期ともいえる。次のような指摘が思い出

される。「工業化が深まる過程で競争力を早期に失う性格をもつ繊維（さらに雑貨）を軸にして工業都市の地位を築いた大阪は、それゆえにこそ、そうでない東京が、わが国の工業化の進展とともにその地位を高めていった事実とは全く逆の経験を早々と余儀なくされ」という見解である¹⁸⁾。

それでは、この構造転換の過渡期的諸相は、大阪東部の工業化過程において、どのように投影させていたのであろう。以下において、この点を『全国工場通覧』から考察しよう。前述の表3は昭和前期（4，8，12年）の工場数を町村別に抽出したものである。昭和4年当時、従業者5人未満であった経営が、8年や12年には、5人以上の経営規模になり、『全国工場通覧』に名を連ねることも、大阪市からこの地域に流入して、新規に5人以上の経営規模で工場を経営することも、工業化の諸相といえる。各町村では、若江村を除けば、工場数の増加傾向がよみとれる。また、大戸村は昭和4年、昭和8年に記載された工場が一つもなかったが、昭和12年には9工場が数えられた。総体としての工場数は昭和4年の197工場から、8年には232工場に増加し、そして、12年には、699工場と昭和4年の3.5倍になっていた。

この間、布施町は昭和8年には高井田村と合併し、12年には、小阪町、楠根町、長瀬村、弥刀村、意岐部村を合併して、布施市になっていた。また、昭和6年には、東六郷、西六郷、北江の三村が合併して、盾津村になった。昭和4年の布施市域にあたる町村の工場数は101で、東大阪市域にあたる全工場数の約51%を占めていた。それが昭和12年には455工場を数え、全体の65.1%が西部地域の布施市域に立地する結果になっていた。工場数の増加傾向は4.5倍で、東大阪市域全体の増加率、3.6倍を越えていた。同様の傾向を示したのは、東部地域の隣接する二村、枚岡村（5倍）と繩手村（4.3倍）である。東部地域の大きな工業集積地として拡大してきている。そこで、この二つの地域を『全国工場通覧』の内容から、以下において、概観しておこう。

〔布施市域〕

布施市域にあたる、昭和4年の町村の工場数合計101の内、最も工場数が多いのが、「その他の工業」で、26工場を数え、次いで化学工業（25）、金属工業（23）となり、紡織工業は19工場、この地域を代表する工業とは言えなかった。この時、2工場にとどまっていた機械器具工業はその後急速に工場数を増加させ、昭和12年には、89工場となり、最多業種の金属、143工場、次いで化学の100工場を合わせると、機械、金属、化学の三業種の工場数は332工場となり、布施市域の工場総数の73%を占めるま

18) 辻吾一著「戦前期大阪の工業：統計資料による若干の考察」『経済学雑誌』第90巻第2号（1989.7）、大阪市立大学経済学会、96頁。

でになっていた。

最も、重化学工業部門といっても、そのほとんどが大企業の活躍するような業種ではない。たとえば、金属の場合、鉄瓶や各種機械部品を製造する鑄造所が最も多く、57工場を数える。金網工場も多く、17工場が記載されている。鋳・ネジ・ナットを製造する工場も10を数える。それ以外では、ペン先、ナイフ、食器、メリヤス針、ファスナー、ブリキ玩具等を製造する鉄工所や金属製作所がある。化学工業では、櫛、腕輪、眼鏡枠等のセルロイド製品の製造・加工する工場が53を数え、最も多く、ゴム風船やゴム靴等の製造に従事するゴム工場も10工場ある。機械器具工業では、旋盤等の小型工作機械や紡織用の機械部品、自動車や自転車の部品、各種バルブやガスメーター、ミシン部品等の製作に従事する多様な鉄工所がほとんどであった。昭和12年には代表的な地位を重化学工業部門に譲っていた「その他の工業」では、19の釦製造工場がある。紙紐・テープや紙箱等の紙製品加工工場が9、ゴム防水布の製造工場が6、作業服や子供服等の縫製工場が5、傘部品製造工場が3、それ以外にも、魔法瓶、煙草用パイプ、文化人形、学用品といった雑多な製品の製造や加工がおこなわれていた。

表7 布施工業の創業年分布表（昭和12年）

（単位：工場数）

創業年	紡織	金属	機械器具	窯業	化学	製材木製品	印刷製本	食料品	その他工業	計
明治	7	8	5	1	4				1	26
大正	14	24	8		14	1		1	16	78
昭和1～5年	9	9	9	2	15	2			7	53
昭和6年		5	3		4				4	16
7年	3	2	5		5			1	3	19
8年		8	8		10			1	10	37
9年	2	17	7		9	1			10	46
10年		25	8		14		1		8	56
11年	2	15	11	1	11	3			3	46
12年		29	22	1	13				7	72
不明		1	3		1			1		6
計	37	143	89	5	100	7	1	4	69	455

（注）前掲『全国工場通覧』より作成。

次に、表7をみよう。これは工場の創業年を表にしたものである。昭和12年当時の布施工業を構成する工場449（創業年不明6工場を除く）の内、76.8%にあたる345工場が昭和に入ってから創業である。特に、世界恐慌後の昭和6年以降に創業した工場は246と昭和期総数の85%を占めている。紡織工業の場合、昭和6年以降に創業した工場は僅か7工場にすぎず、過半数の21工場が明治・大正期の創業であり、歴史が感

じられるのに対して、重化学工業部門は約7割が昭和6年以降の創業に集中している。新開地としての布施工業の一端が若い工場を担い手にしていることが観察される。

〔枚岡・縄手村域〕

昭和12年の枚岡村には、100工場の内、79工場が金属工業で、その大半が鉄線、鋼線、銅線、真鍮線の製造と加工に従事し、線屋の村と呼ばれた伝統の継承が強調される。出荷製品でいえば、49工場が鉄線であったが、真鍮線や銅線の製造工場が10、鋼材、引抜磨ボードやシャフト、鉄管等の金属製品工場が10、そして主に鉄線加工のメッキ工場が4あった。これら以外では、メリヤス針、ハトメ、ナット、座金、傘部品、金網を製造する工場もあった。中河内郡のこの地域では、ほとんどの工場は「一経営者一工場」であったが、この村の中川製線（代表者：中川熊吉）は第1工場から第9工場まであったことが記載内容より明らかである。また、代表者が違うが、同姓工場が西田、入江、車谷、横谷、山下、北川、山西の7組もあり、地縁・血縁の工業展開の一端を示すものといえる¹⁹。「昭和6年以降の創業」とする工場は金属工業の約半数にあたる40工場を数える。生駒山麓の水車工業から発達してきた線屋の村に、新しい工業化の息吹が感じられる。また、機械器具工業でも、6工場の内、伸線機の製造に従事する工場だけが、大正期の創業であり、その他の自転車部品製造工場（2工場）、リードワイヤー製作工場（2工場）および紡績機械部品工場はいずれも「昭和6年以降の創業」であった。金属工業に次いで工場数が多かったのは「その他の工業」で、9工場を数える。その内、歯ブラシやその他のブラシ等に使用する豚毛を整毛する工場が6あった。それ以外では、カレンダー、包装紙、釘の各工場である。

他方、縄手村は別名バリカンの村として有名であった。しかし枚岡村の様に金属工業の突出型と違い、金属工業（15工場）、機械器具（11工場）、化学（10工場）がほぼ同じ程度の活動をしていた。これら三部門で村の工場総数の70%になった。金属工業では、理髪用ジャッキやハサミの製造とモンキーレンチやペンチ、銑鉄はさみといった工具製造が主力となっており、明治、大正の創業が多い。他に鉄線、メリヤス針、建築金物を製造する工場が各1工場あった。機械器具工業では、タップ、カッター、機械工具、電気バリカン、織物機、ガス器具等が製作されていたが、1工場（創業大正15年）を

(19) 地縁的、血縁的な繋がりを特色とする産地について、次ぎのような指摘がある。主な工場の幹部の多くはそれぞれお互いに姻戚関係にあり、その人的な交錯は複雑で、伝統ある線屋には、地元では、何々一族と呼び習わされていた。それだけ業界は排他的であり、経営者は保守的であったという。（前掲『鐵鋼二次製品の工業の実態』22頁参照）

除けば、昭和10年前後の創業という若い工場で構成されていた。化学工業では、歯ブラシ等のセルロイド加工と、サンドペーパー等の紙製品加工の二様の工場があったが、機械器具工業とは対照的で、明治、大正の創業が多かった。「その他の工業」は枚岡村と同じで9工場を数えるが、藤椅子等の家具工場（4工場）や義手の製作に従事する研究所は枚岡村には見られない工場であった。他には、整毛工場、紙缶工場と釘工場（2工場）がある。

最後に、両村の工場を合わせると、151工場になる。その内の73工場が「昭和6年以降の創業」であった。新しい工業化エネルギーが大阪に隣接する西部地区の布施地域では70%（工場数）であったが、それに比べると50%という割合は低いが、この東部地区にも、昭和12年になると、金属・機械器具工業を中心に新しい工業化がようやく地域形成の大きな力となり始めたことを物語っている。

5. 結びに代えて——工業化の特徴——

東大阪市域の昭和前期の工業化動向の一端を抽出する作業として、『全国工場通覧』より、町村別に工場を整理してみた。村単位の工場数の把握は通常発表されている統計表では把握できないが、この通覧は名簿であることから、村の大字までの所在地が記載されている。それ以外には、創業年と主要製品および代表者名が掲載されているだけで、それ以上の情報をくみ取ることができないという限界があるが、この時期に地域を代表する工場がどのような活動をし始めたのかを知る手掛かりになった。これまでの考察から、次のような点が要約できる。

(1) 東大阪市域の昭和前期の工業化動向の特徴は二つの発展軸から成る。その一つは大阪東部工業地帯に隣接する布施市域であり、もう一つは生駒山麓の水車工業に起源をもつ枚岡・縄手村域である。布施市域（455工場）及び枚岡・縄手村域（151工場）を中心にした工業展開は顕著であった。この両地域だけで、86.7%にあたる606工場が集まっていることになる。その内の60%にあたる365工場が昭和6年以降の創業である。

(2) 業種的に、金網、鉄線、鋳物、釘等のいわゆる金偏工業が中核になって、伝統ある捻糸工業や新参入のセルロイド工業が産地を形成していたところへ、新たに機械器具工業やその他の多様な都市型工業が参入し、東大阪市域に点在する形で展開してきた村単位の工業化が一気に面的展開を推進したのである。その原因の一つには、阪神工業地帯を中心にした機械需要の増大が投影して、各種機械加工や部品製造に従事する鉄工所

戦前昭和期の大阪府郡部の工業化について（衣本）

や鋳造所、金属製作所等という工場の活動領域が広げられてきたこと。二つには、大阪都市圏のインナーリング部分への組み込みが鉄道や電気事業により進展し、宅地化とともに都市型工業の活動領域へと近郊農村部を変えたこと。その結果、多様な日用品雑貨の製造や自転車やラジオ・ミシン等の民生用機械製品の製造や加工が進展したのである。

要するに、現東大阪市域の昭和前期の工業化に関していえば、昭和4年段階でみた工業化はもっぱら西から東に向かっての「途上」であったが、「満州事変」を経て日中戦争へと突き進む軍需依存型経済の高まりが強く感じられる頃には、大阪経済の周辺部への工業化は全面的な広がりになって浸透し、特に、布施地域と枚岡繩手地域における二つの展開軸が形成される勢いであった。

(3) 東大阪市域には、明治から大正期にかけて、鋳物・金網・鉄線・理器といった金属工業が地場産業として一定の集積をしていたという土地柄が素地になって、工業構造の高度化は確実に浸透した（表3参照）。昭和4年当時、工場の多い順に並べると、「その他の工業」、紡織、金属、化学、機械器具であった。その上位二業種の軽工業が工場数の過半となる53.7%を占めていたが、その比率は昭和8年には40.9%に低下し、昭和12年には28.4%にまで落ち込んでいた。逆に、金属、化学、機械器具の重化学工業部門は、昭和4年の43.7%から、昭和12年には68.6%にまで拡大していた。東大阪市域での重化学工業化の進展の一端がうかがえる。特に、最も工業集積が進んでいる布施市域の場合は、重化学工業化率は73%であった。また枚岡・繩手村域では、線屋の村・バリカンの村の伝統が核になって、さらに高く82.1%であった。

(4) もっとも、地域で活動する工場群が重化学工業化したとしても、地域の住民が巨大な資本による生産設備に驚かされるというのではなく、その多くは中小工場である。そして、この周辺に、さらなる零細な規模の工場が存在し、生産の裾野を形成させていたことが指摘できる。たとえば表8は表3と同じ時点の「布施市の工業統計」である。表3で把握できた455工場に対して、表8には1134工場と2.5倍の工場数の存在が示されている。『全国工場通覧』が「五人以上の職工を使用する場合の工場の工場主より提出せる調査票」をもとにして作成されたものだけに、場合に因っては、なんらかの理由により工場主より提出されない場合もあるが、政府（商工省）が「工場統計規則」にもとづいて実施した調査であることを勘案すれば、有力工場の掲載率は高く、そのような事例は少なかったと考えられる。したがって、両表の差、679工場のすべてではないがその大半を5人未満の規模の個人経営の零細工場が占めていたと考えられる。このような零細工場の集積は布施市域が都市化に必要な人口集中の基盤となるコンプレックス・

エリアを内在させ、「特色ある産業地域社会」を形作りつつあったといえる^㉑。

また、枚岡村では、昭和11年の数字であるが、工業の戸数101であり、従業員も1012人であった。1工場数当たり10人という規模であった^㉒。『全国工場通覧』では、昭和12年の数字であるが、100工場が把握できる。このような掲載率の高さは伸線工場を中心にした村であること、また規模的に零細な工場といっても、ある程度の規模がないと鉄線、針金等の二次製品の製造・加工に従事できなかったのである。この当時枚岡村の農家戸数は199で、ほぼ工業の2倍であった。要するに、東大阪市域の工業集積の動きは布施市域のように地域社会の生活の中に溶け込んで混在する町工場や枚岡村のように「野良仕事」と接する村工場の集積といった中小零細工業を中心とするものであった。

表8 昭和12年布施市の工業（昭和12年12月31日現在）

	組織別・業種	工場数	従業者数	年間生産額(円)
個人	紡織工業	88	600	2,261,251
	金属工業	223	1,410	5,161,733
	機械器具工業	117	823	1,411,724
	窯業	18	112	237,229
	化学工業	141	945	2,796,579
	製材及木製品工業	50	114	189,990
	印刷業及製本業	5	6	5,350
	食料品工業	157	311	419,327
	その他の工業	206	1,121	1,222,420
	個人総数	1,005	5,442	13,705,603
法人	紡織工業	7	205	1,453,506
	金属工業	37	757	2,821,178
	機械器具工業	39	1,670	4,965,773
	窯業	1	202	1,393,829
	化学工業	25	427	3,080,142
	製材及木製品工業	2	43	110,020
	印刷業及製本業	1	5	22,127
	食料品工業	2	62	127,000
	その他の工業	15	314	1,678,231
	法人総数	129	3,685	15,651,806
個人・法人総数	1,134	9,127	29,357,409	

(注) 1. 資料「布施市土地寶典」昭和13年11月発行

2. 東大阪商工会議所編『東大阪商工会議所五十年史』75頁より引用

(5) かくして、東大阪市域に集積した中小零細工場群の存在は、その生産内容から、次のような特徴がうかがえる。1) 大阪工業の工業化高度化に伴う機械需要の高まりと、都市化の拡大に伴う雑多な需要の発生に対応した、都市型工業としての特化、2) 釘やセルロイド製品のように外貨獲得のための輸出工業としての商品特化、3) 産業の米とし

㉑) 板倉勝高・井出策夫・竹内淳彦著『大都市零細工業の構造』新評論、1973年3月、168～169頁参照。

㉒) 前掲『鐵鋼二次製品工業の実態』11～17頁参照。

戦前昭和期の大阪府郡部の工業化について（衣本）

ての鉄鋼の二次製品，三次製品の加工基地への特化，を主に内容とする「ものづくり」領域の広まりを意味する。言い換えれば，この当時の東大阪市域に展開した重化学工業化は，大阪工業の近郊農村への外延的展開としての活動がその地域の特性を生かした雑多な中小零細工場の集積を内実とするものであった。